

飛騨市民病院の研修医劇的増加につながった 神通川プロジェクトの成果

岐阜県・国保飛騨市民病院長 黒木嘉人

国保飛騨市民病院の概要

飛騨市は岐阜県最北端で富山県との県境に位置し、人口約2万5,000名で、特に当院のある神岡町は人口約8,600名、高齢化率が43%を超えている山間地区である。当院の診療圏は神岡町と旧上宝村（現在の高山市上宝町と奥飛騨温泉郷）を合わせた「高原郷」地区が中心であり、対象人口は約1万1,000名である。当院の病床数は一般病床50床、地域包括ケア病床8床、医療療養型病床33床の合計91床である（写真）。当院の最も大きな問題は医師不足であり、平成17年に12名であった常勤医師数は平成29年度には常勤医師は5名となった。

専門外来は富山大学を中心に約30名の非常勤医師により13の診療科（呼吸器内科、腎臓内科、循環器内科、糖尿病内科、整形外科、脳外科、心臓血管外科、婦人科、小児科、皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科）を行っている。

当院への医師派遣は富山大学が中心であるが、富山大学の各医局も医局員不足のため当院への常勤医派遣の増員は困難な状態であった。その解決策への糸口を探る中、平成24年度から富山大学の地域医療実習事業（神通川プロジェクト）が開始された。今回、神通川プロジェクト開始後に研修医が劇的に増加した件について報告する。

神通川プロジェクト

神通川プロジェクトとは、富山大学地域医療支援学講座（有嶋拓郎教授・当時）、総合診療部（山城清二教授）と協力し、当院を中心に隣接する介護・福祉施



写真 国保飛騨市民病院外観

設を一体の教育機関と考えて、医学生や教官の往来を密にして地域医療を8年（医学部6年＋初期研修2年）、一貫型の学習や修練の場とするものである。その資金には岐阜県地域医療確保事業費補助金が充てられ、富山県と岐阜県の協力体制による事業で、すなわち「人材は富山から、資金は岐阜から」と県を超えたコラボレーションである。

折しも富山大学としては、医学生の地域医療実習を開始するために受け入れ先の病院を検討しているところであり、両者の思いがタイミングよく一致し、当院は実習受け入れをした最初の2病院の一つとなった。院内には専用研修室を設置し、病院から徒歩5分のところに男女それぞれ3名ずつ合計6名までが宿泊できる専用の宿舎を準備した。また、岐阜大学地域医療医学センター（村上啓雄教授）と協力して医学部3年生を対象に、地域医療実習「M3地域配属実習」受け入れも同時期から開始された。

研修内容

毎朝医局ミーティングにて、新入院の患者と研修医

の担当患者の症例検討を行った。研修医は入院患者の主治医となって担当し、指導医が副主治医として指導しながら、入院治療計画から退院調整まで行った。外来では総合診療を担当し、外科手術、整形外科手術にも入った。救急隊からのホットラインPHSを携行して救急患者に対して初期対応を行った。その他にコメディカルの業務体験、老人保健施設「たかはら」での介護体験や訪問診療、訪問看護の同行を行い、また、地域住民への出前講座や特定健診の保健指導などの健康づくり・予防活動も担当した。毎日夕方には常勤医師全員とその日の振り返りをし、日々のポートフォリオの作成をした。

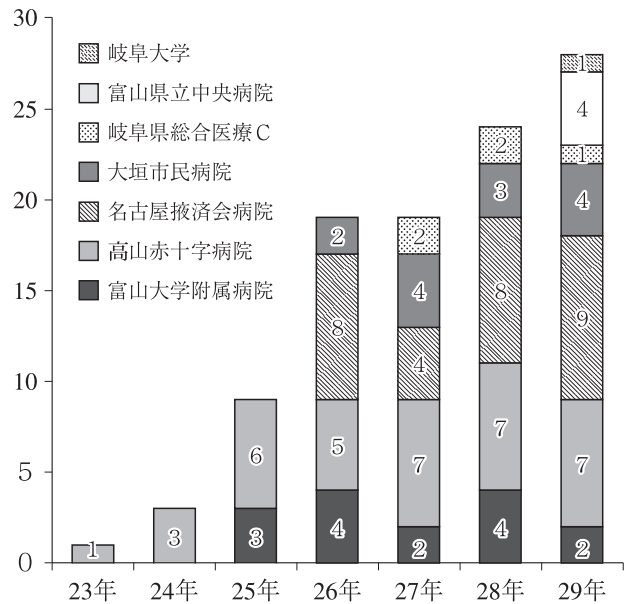
大学の各医局等から派遣される専門外来が多数充実しているため、専門医へのコンサルテーションがスムーズに行えた。チーム医療としての緩和ケアカンファレンスやNSTカンファレンスに、多職種による病棟総カンファレンスに参加した。また、平成26年度から2週間ごとに富山大学総合診療部を中心に、複数の関連病院が同時に参加するテレビカンファレンスを行っている。期間中には受け持ち患者の「ライフストーリー・レポート」を作成する。また週2回、朝のミーティング時に「飛騨朝いち3分ミニレクチャー」を行っている。他大学出身の研修医や富山大学医学生、岐阜大学医学生と交流することができ、屋根瓦式の研修の場となった。記念写真の撮影や研修期間中には必ず懇親会を行って歓迎と交流の場を設け、修了時には院長からの個々に手書きの手紙を渡した。

初期研修医の受け入れ劇的増加

神通川プロジェクトによる富山大学医学生の受け入れは、平成24年度から29年度まで合計で112名となった。また、岐阜大学のM3地域配属実習および夏季実習では、24年度から29年度まで11名（夏季11名）を受けた。実習した医学生のアンケート満足度調査でも高い評価を受けた。

研修医の受け入れも年々増加した。富山大学からは学生実習の成果を反映して、研修医が当院での地域医療研修を希望した。近隣の高山赤十字病院は当院の3

図 研修医受け入れ人数の推移（合計103名）



次救急受け入れ病院であり、病々連携と医師不足支援の意味もあって、当院での研修医の地域医療実習にご協力をいただいた。岐阜県内の大垣市民病院には、当院が研修協力病院に加えていただくようお願いしたことから派遣が開始された。また、愛知県の名古屋掖済会病院は、富山大学地域医療支援学講座の有嶋拓郎教授のご紹介により、当院を研修協力病院に加えていただいた。こうして平成25年度に9名、平成26～27年度にはそれぞれ合計19名、平成28年には24名、平成29年にはついに年間28名と劇的増加となった（図）。

研修医のアンケート調査結果

満足度アンケート（visual analog scale: VAS）の結果では、実習全体87.9、外来77.4、病棟84.0、施設介護76.0、訪問看護77.6、学習環境98.9、宿舎81.2と各項目にて高得点となった。病棟、学習環境がなかでも高得点であったが、施設介護はやや低かった。

「飛騨市民病院を中心とした地域医療は研修前のイメージと比べてどうでしたか？」の質問に「悪かった」を0、「イメージ通りだった」を50、「良かった」を100としたVAS評価結果は、50未満は0%、50は9.4%、51～75は25%、76～99は50%、100は15.6%と51以上の

占める割合は90.6%で、研修前のイメージより良かったとの回答が多くを占めた。

「将来飛騨市民病院で働きたいと思いますか？」の質問には、「思わない」を0、「それ程思わない」を25、「わからない」を50、「まあ働いても良い」を75、「働きたい」を100とした質問には、50未満は10.3%、50は19.4%、51～74は12.9%、75～99は54.8%、100は9.7%で、働きたいとの気持ちを持った51以上を回答したのは全体の77.4%を占めた。

自由記載内容については、「主治医として主体的に出来た」「救急以外の通常の外来診療が体験できた」「毎日のカンファレンス、指導体制が良かった」「多職種連携を体験できた」「救急、外来、病棟と全部経験できた」「人が温かい、スタッフが優しい」「学習環境、教科書類や宿舎の設備が整っていた」「内科系、外科系と幅広く様々な患者を診れた」などの意見が多くみられた。

研修医の増加をもたらした要因分析

研修医のアンケート記載等をもとに、研修医増加の要因について分析してみた。

1. やり甲斐

研修の修了時アンケート記載の感想で最も多かったのは、入院主治医となって主体的に患者を診ることができたことである。初期研修医は派遣元の施設では、指導医のもとで診療することが多く、主治医としての経験が乏しい。当院では指導医が患者ごとに必ず副主治医として指導しつつ、出来るだけ主体性をもって診療に当たることで、やり甲斐と責任感の育成につながったと思われる。受け持ち患者も内科系、外科系と入り混じって幅広い疾患分野で経験でき、救急から外来、入院まで一貫して患者を担当することも出来た。卒後3年目からは主治医としての責務を負うことになるが、その準備段階としての良いトレーニングになったとの感想もあった。

また、「総合診療」として一般外来を担当することも大きな意義があった。救急外来は行っていたが一般

外来の経験に乏しく、時間内に自分で考え治療し、またその後の再診も自分で見ることで、経過も把握できることが研修医にとってとても良い体験であった。

2. 学習環境や宿舎などハード面の整備

パソコンや机を各人に一つずつ準備し、必要な教科書、医学雑誌、教育用DVDなどの教材を配備した。また、オンラインでの文献検索ツールも整備し、院内はWiFi環境を設置して、個々に調べたいものについて不自由なく勉強し、知識が得られるように配慮したことが研修医の学習意欲につながった。住居の環境についても病院から徒歩5分の距離に専用宿舎を整備し、パソコンの他にも日用品はすべて配備して、快適に暮らせるようにした。しかし、中には共同生活に馴染めない研修医もいて、今後は個別の宿舎の検討も必要かと思われた。

3. 指導体制の充実

毎朝のミーティングで、研修医の受け持ち入院患者について常勤医全員とカンファレンスを行った。診療科の垣根はまったくなく、研修医の質問については丁寧に対応したことで、指導者に対する評価は良いとのアンケート回答がほとんどであった。また、夕方には常勤医師全員とその日の病棟、外来診療含めて振り返りミーティングを行い、ポートフォリオを毎日提出するようにした。

4. ミニレクチャーなどでの学習機会の設定

魅力ある研修のためには、地元の名物やご馳走等も必要ではあるが、実際のところ研修医は学習の機会を求めており、その欲求を満たすことが重要であると考え、ミニレクチャーを行った。朝のミーティングに週2回のペースで、各自の自由なテーマでA4用紙1枚にまとめた内容で「飛騨朝いち3分ミニレクチャー」と称して、常勤医と研修医の持ち回りで行うことにした。最新の知識の取得や受け持ち患者の問題点などについて学ぶ良い機会となった。

5. ライフストーリーレポート

研修期間中に受け持った一人の患者さんについて、

「ライフストーリー・レポート」を作成するようにした。通常の疾患の観点ではなく、患者さんの生きてきた人生を聴取し、患者の持つ病気の意味、患者を取り巻く家族、知人、地域を理解して患者を全人的に診ることの重要性を再認識することを目的とした。このようなレポートを作成することによって、研修医はじっくりと患者さんと触れ合う時間が出来、病気の背景にある人生までに目を向けることの大切さを学んだと感じた。

6. 他職種業務体験やカンファレンス等で多職種連携に参加する

放射線科、検査科、薬剤科、リハビリテーション科にコメディカルの業務体験を組み入れた。他職種の業務内容を知る機会は意外に研修元の施設では体験することが少なく、チーム医療のための基礎的な視点の育成となった。当院では週1回、病棟総カンファレンスとして医師、看護師、リハビリテーション、管理栄養士、地域連携室、医療事務などのスタッフで、入院患者の多職種カンファレンスを行っている。医師以外の職種との交流と連携を実感することは、研修医にとって貴重な体験となった。

7. 地域の魅力を伝える（街中案内、懇親会、病院を守る会との交流）

研修期間には、事務長が地元の観光案内を行った。廃線となった鉄道を再利用した特製の自転車で走る人気の観光スポット「レールマウンテンバイク・がったんゴー」は大好評である。また、地元の「飛騨牛」を堪能できる懇親会も行い、歓迎の気持ちを伝えた。

なお、当院の医師不足から地域医療に危機感を感じた住民が立ち上がり、平成25年に「飛騨市民病院を守る会」という市民団体が設立されている。会の活動の一環として研修医や医学生との交流会が行われ、地域医療を支えてくれる研修医に対して直接住民が感謝の気持ちを伝え、町ぐるみで研修医を歓迎する機運が高まっている。

8. 病院スタッフの受け入れ姿勢

地域がら住民も医療スタッフも大変人情味が溢れ、

若い研修医たちへの受け入れは良好であり、研修医たちにとって「みんなが優しい」と感じられたのは、地域の大きな魅力であると思われた。働きやすいと実感したことは、アンケートで将来も当院で働いてもよいと回答した要因にもなっている。

「電子カルテの不慣れなうちは看護師さんが助けてくれて、慣れたら診察に集中できた」とスタッフの対応が良く、「病院内のスタッフ皆さんが歓迎して下さいている雰囲気を感じられ、とても心が温かくなりました」等の感想がみられ、働きやすい職場であることも魅力の大きな一要因であった。

9. 研修元訪問、研修説明会、情報発信

研修元の医療機関へ積極的に訪問し、研修説明会にて当院の研修の魅力をアピールすることも、研修医の確保には効果があった。実際に説明会のプレゼンを聞いて、当院を研修先に選んだとする研修医も多かった。また、今回のように学術誌や学会発表などで当院の研修体制の情報を広く発信することも重要であった。当院が積極的に初期研修医の受け入れを行っていることを全国自治体病院協会雑誌に投稿したことで、富山県立中央病院から研修医の受け入れの申し出を受けることにつながった。

今後の展望

神通川プロジェクトの継続を通して、当院を希望者とする研修医の確保をさらに発展・維持させたいと考える。また平成29年度からは、富山大学総合診療部から後期研修医の派遣を獲得することとなり、これまでの努力がようやく結実することとなった。今後はいくつかの施設と協同した総合診療専攻研修プログラムも予定されているので、継続的に当院にて配属されることに期待したい。また一方で平成28年4月には、岐阜大学医学部に設けられた「地域枠」の第1期生10名が県内の各地域に配属となった。翌年は15名、翌々年以降は25名が地域へ配属となることから、これらの医師への期待は大きい。また一層大学との連携を密にして教育病院としての存在意義を高めていき、指導医として

の常勤医師確保につながるよう、現在飛騨市としての支援態勢の施策が作られつつある。

総括

医師不足の解決策のひとつとして開始された富山大学との地域医療実習事業（神通川プロジェクト）を継続し、周囲の病院に働きかけた結果、初期研修医が年々劇的に増加してきた。今後もさらに充実した研修内容を目指し、常勤医師を増員し地域の医療を発展させるよう努力を継続していきたい。

研修修了者からのコメント



飛騨市民病院での研修を終えて

富山県立中央病院 研修医

川瀬翔太郎

富山県立中央病院初期研修プログラムの中の地域医療研修として飛騨市民病院で5週間研修を経験した。この病院での地域医療研修は今年から新たに選択肢の1つとして選べるようになったもので、病棟患者を主治医として担当できるプログラムと神岡町の豊かな自然の中での研修に魅力を感じ、この病院を希望した。

飛騨市民病院での研修で今まで経験したことのない多くのことを学ぶことができた。まず、病棟患者を主治医として診ることが非常に良い経験となった。今までの研修で上級医の下について患者を診ていた時以上に、責任感を持って日々の診療に望むようになり、必要な検査や治療を自分で考えることで、日々の問診や身体診察への姿勢も変わり、患者の生活の背景などより深い部分も自然と把握する癖を身につけることができた。自分が外来から入院させた患者をそのまま受け

持ってみていくのも今までにない経験であった。

初期対応から病棟管理まで自分で行うことで、より疾患への理解を深めることができた。また、専門科の先生方もコンサルテーションしやすく、患者を紹介し直接質問しに行くと、とても丁寧にご指導していただいた。同時に自分で解決すべき問題と各科の先生にコンサルテーションすべき問題を見極める力も身についた。上級医の先生方は大きな失敗がないようにきちんと見てくれているが、基本的には私の考えを尊重してくれており、やる気を出せば何でも挑戦させてくれた。担当患者に胃カメラが必要なときは、指導の下自分で施行することもできた。

日々の生活の中で神岡町における飛騨市民病院の存在の大きさにも気が付くようになった。住民の方々は病院の医師のことを詳しく知っていて、仕事ぶりや患者さんの接し方にとっても信頼を置いているようであった。単なる医療機関以上の存在であることは研修中にたびたび実感し、地域においてこの病院がもつ役割を学ぶことができた。訪問看護や往診への同行の経験からも、大病院に求められているものとはまったく違う、より地域に密着した医療のあり方を知ることができた。在宅医療は今後需要が増えていく分野であり、いずれは自分も携わりたいと考えているので、実際に経験できてとても勉強になった。また、住民に見られていることを意識しながら日々を過ごすことで、大変身の引き締まる思いがした。

この5週間の地域医療研修を通じて、大規模の病院では経験できないことを数多く経験することができた。これらの経験は私の今後の医師としての人生の基礎となると思う。また、地域医療には自分も関わりたいと考えているのでこの経験を生かし、へき地の医療過疎に対し、何か貢献できることがないか考え努力していきたい。

なお、神岡町はとても自然が豊かで、宿舎から病院までの道を歩くときの景色がきれいで空気もおいしく、毎朝とても清々しい気分になれた。食事もおいしく、毎日お店を巡るのも楽しかった。特に飛騨牛は大変おいしく、飛騨市民病院で研修する後輩にはぜひ食べに行ってもらいたいと思っている。